

その他

看護学生が高齢者の理解を深めるために能楽書は活用できるか —世阿弥『風姿花伝』より

Application of the Concept of Noh in the Education of Gerontological Nursing

近藤 裕子¹⁾, 山田 智子¹⁾, 白木 智子¹⁾, 横山ハツミ¹⁾

Hiroko Kondo¹⁾, Tomoko Yamada¹⁾, Tomoko Shiraki¹⁾ and Hatsumi Yokoyama¹⁾

I. はじめに

核家族化の進展により、家族の中に高齢者を見るのが少なくなり、若者と老人が直に会話することや、何かを行う機会は少なくなっている。このような中で、看護の対象となる患者層は高齢者が殆どであり、それも後期高齢者の入院が多い現状がみられている。

老年看護学を学ぶ看護学生も、高齢者と接する機会の少ない者たちである。そのため、加齢による身体の変化や心理について老年看護学で講義を受けても、高齢者をイメージすることが難しい状況がみられている。高齢者理解として高齢者疑似体験（竹田ら，2001；橋本ら，2002；原沢ら，2004；伊澤，2007；伊澤，2008；高岡ら，2008；竹村ら，2009）や、心理的变化を把握するためのCAI教材（横山ら，2009）や、シミュレーションゲーム（田沢，2007）などを講義や演習に取り入れ、学生の学びを支援する授業が行われ、学習効果が報告されている。学生は臨地実習の場で高齢者と対峙し、高齢者の身体的・心理的变化について、はじめて理解できたという声も聞かれている。このことは学生が、高齢者をイメージすることの難しさを示している。

筆者は以前、世阿弥の能楽書に著述されている理論を、看護技術教育へ活用することについて論じた（近藤，1997）。『風姿花伝』で論じている能の修得過程は、そのまま技術の習得過程に通じると考えている。さらにこれらの書物には老体について記述した部分があり、看護学生が高齢者を理解する一助となることを論じた（近藤，1998）。能楽の教えは、伝統的な日本の教育としてとらえることができ、今日の看護学教育にも活用できる内容があるのではないかと考えた。

II. 『風姿花伝』を通して高齢者を理解する意味

1. 『風姿花伝』が教示するもの

世阿弥によって著述された能楽書は、能楽者に対してどのように能を演じれば、観客が満足し、演者も「花」を得ることができるかを中心的課題としている。能楽書は演じる者に伝える内容で構成されている。

世阿弥の代表作である『風姿花伝』「第一年来稽古」では、年齢によって稽古の内容が異なること、各年齢に応じた稽古のあり方について述べている。これは発達段階によって獲得すべき課題があるといいかえることができる。

1) 広島国際大学看護学部 (Department of Nursing, Hiroshima International University)

現在では、エリクソンやハヴィーガーストなどによって人間の発達課題が示されている。世阿弥は、それぞれの年齢に適した稽古の方法があり、その年齢ごとに何を稽古として学ぶことが、その後の芸の向上に関係することを述べている。芸について注意しすぎると、モチベーションの低下からやる気を失うことや、能に対する嫌気をおこすので、その年齢の特徴を踏まえた稽古があると、年齢と稽古の内容の重要性を指摘している。そして自分が演じる芸を、自分は上手であると自覚することは、自分自身のためにはならないこと、自が舞台を振り返って自分自身を客観的に見つめ知ること、それが能の神髄を体得していく過程であると説いている。その年代における危機は、自分が上手であると思いが上がることであるという。

「第二 物学（ものまね）」では、能で演じる各役に扮する演技の方法として、女性をはじめ、老人、神、鬼などの9種類の役をあげ、これらの役に扮した場合の心身の演じ方が記されている。役に扮する演技者は、どんな役の場合でも、その対象を細部にわたって似せることが本来の目的である。しかし、一方においては対象によって程度の差が考えられるべきと、それぞれその人の社会性や心理など個別性をとらえて演じることの必要性を説いている。

物学にとりあげられている「女」では、女を演じる場合に注意することについて背景の異なる女性二体を例にとり説明している（堂本、1998；表ら、1996）。

宮中につかえる高貴な女性に扮する場合には、手軽にその生活に触れることができないので、よく調べた上で演じる必要がある。着物や袴の着方にしても、全て昔からの方式があって、勝手に着付けするわけにはいかず、知っている人によくたずねて間違いのないようにするべきである。

一方、一般女性の姿は常日ごろから見馴れているから難しいことでなく、衣・小袖の姿はおおよそ女性らしい美しい姿かたちであればよい。

女性の立居振舞はしとやかにするべきであり、顔の角度が上をむきすぎると、面の美貌が見苦しく見えるし、またうつむくと、後姿が悪い。首に力を入れすぎると、いかつい感じがして女らしくなくなる。

上記では、よく知っている一般女性の服装は、女性らしく手足をあまり出さない着方をすればよい。しかし、知らない身分の服装はよく情報収集を行うことが必要であり、それにはその地位や生活、服装についてよく知っている人に聴くことが必要である。着物の種類だけでなく、顔や首の角度によっても女としての美の表情があらわれる。つまり女面を付けている顔の角度が上を向きすぎると面の容貌が見苦しく見える、またうつむくと悲しい容貌と変化する、そのうえうつむくと後姿が悪くなると指摘している。女を女らしく舞うには、どのような女性を演じているか、その女性の内面までを表現できるように研究し、観客の評価を仰がなければならない。それには女性の外観や表情をよく観察し、内面までも洞察表現できる演者になることにより演じている女が、心身共に女として見ることができると記述している。このことを看護でいうならば、看護の対象者の表している外観を観察しつつ、その内面までも観察することにより、その人の状態が理解できるということと考える。

次に「老人」については、老人を演じることは能の中でも至高至難のわざという。老人の立居振舞は、老年であるからといって身体を折り曲げ、よぼよぼした感じを現したのでは、古くさい演技になり「花」がない。「第七 別紙口伝」では、『物真似に似せぬ位あるべし』と記述し、老人だからといって腰をまげたり膝を折ったりして、意識的によろよると演じるのはよく

ない。なぜならば現実の老人は、年寄りらしく見えまいとしてかえって若々しく振舞いたがるものであり、そうした老人の持つ心理をとらえて演じるべきだという。つまり能を演じる時には、女を演じる時と同様に身体的な表現だけでなく、演じる役の心理や人間性を見いだして役づくりをすることの重要性を指摘している。

2. 活用の視点

老年看護学では老年期の人を理解する一助として、高齢者疑似体験が取り入れられている。高齢者体験用の装具を装着すれば、背中や膝が曲がり外見的には高齢者の身体的特徴を表している。その姿で歩行や買い物、読書などを体験することで、学生は加齢によるさまざまな機能の低下を実感することになる。「足が重たい、肘関節が屈曲しない、見ている物の輪郭がはつきりしない」など、学生は運動機能や感覚機能の低下を体験している。「眼が見えにくい、足先が挙がらない、足元が見えない」などは、円背や視野の狭窄からくる身体活動の制限に限定したものである。疑似体験装具を装着し、前述した歩行や買い物、読書などの日常生活動作を体験することにより、高齢者の身体的理解だけでなく、より社会的・心理的理解までも可能となる(高岡, 2008; 井澤, 2007)。疑似体験学習の効果として、動きの不自由さや危険性を実感することで、高齢者の心理にもつながる(原沢ら, 2004)と言われているが、装具を装着し、『物真似に似せぬ位あるべし』のように腰を曲げたり膝を折ったりして、よろよろと歩くだけが老人ではない。老人の心理を十分に理解するには、高齢者と直接接触し、コミュニケーションをとりながら、状態を観察することが重要と考える。

世阿弥は、ある人間を演じる場合には、よくよく外観を観察し、知らないことについては情報収集の必要性を述べ、そこから、その人の外

観だけでなく内面を洞察するようになると、演者として演じる対象に近づくことができるという。このことは看護の対象者を理解するためには、十分に情報収集することや、外観から判断するのでなく、その人の内面も理解することの重要性、つまり対象を統一体、統合体として把握することの視点を示していると考えられる。

III. 世阿弥能楽書が老年看護学の教育に活用できる点

世阿弥は人間を演ずること、それには全体的に人間をとらえることが重要であると説いている。世阿弥の考え方は、現代の看護理論家たちが主張する人間のとらえ方と同じである。学生が高齢者疑似体験を行うことにより、身体的変化が日常生活に及ぼす影響を理解できる。それが心理面も推測しているという(原沢, 2004)。高齢者を統合してとらえようとするならば、世阿弥が「老体」で記述しているように、対象を十分に観察すること、知らないことについては知っている人(高齢者)に聴く姿勢を持つことは、現在の老年看護学教育に活用が可能といえよう。

学生が健康である高齢者や、疾病を持ちながら生活する高齢者の理解を深めるには、高齢者が生きてきた生活過程の理解や、高齢期を迎えての思いや考えを知ること、老人の立居振舞の観察から青年期の自分たちとの違いが分かること、を通して高齢者を把握することが必要と考える。それには、授業の中で高齢者に自らの人生を語ってもらう取り組みも必要と考える。実際に高齢者の歴史ある人生を聴くことで、今の高齢者の存在や、その時代時代の人生の心の変化にも触れられる機会となり、より高齢者を身近に感じるができる。これは世阿弥が老人理解でも述べているように、老人の身体的状態をまねるだけでなく、その人の心理状態やその

人がもつ背景などを十分理解した上で演じると、演者は「花」を得ることができるし、「芸」として観客に賞賛をうけることができるという。つまり高齢者の心身の理解を深めることにより高齢者を理解し、その人に適した看護の提供ができることである。

また『風姿花伝』は、年齢による学習時期があること、その年代の心身の状態を十分に理解した教育の重要性が示されている。世阿弥は50歳以上の人の芸について、枝葉が少なくなつて老木のように、派手な面はないが、美しい花の魅力は残って咲き匂っている、と老年期の稽古のあり方について述べている。これは今までの激しい稽古やその人が歩んできた人生から、身体が若い時のように動けなくなつても、花としての魅力はありつづけるということであり、年齢を重ねることの素晴らしさを示していると考えられる。これは、高齢者を尊重する態度、尊厳の重要性の例として活用できると考える。

IV. おわりに

看護学は学際的学問であり、周辺領域の学問を看護学の中に活用できる。特に古典、それも能楽の教えは、今日の教育方法や学習への示唆を得ることができる。それは日本人の考えや生活様式をふまえた、古くて新しい理論であるといえよう。日本に輸入された新たな理論や考えだけを教育に活かすことも重要であるが、日本古来の思想や考えを活用する方法も並行して取り入れていくことが必要ではないだろうか。

文献

堂本正樹 (1998). 世阿弥, 構想社, 東京.
橋本文子, 松下恭子, 多田敏子 (2002). 看護学生を対象とした高齢者疑似体験の意義—高齢者および介護者体験からの学び, 老年看護学, 7(1), 95-102.

原沢優子, 松岡広子, 星野順子, 宮下美香, 濱畑章子 (2004). 老年看護学における高齢者理解に向けた体験学習の効果と課題, 愛知県立看護大学紀要, 10, 41-48.

井澤晴美 (2007). 高齢者理解に向けた体験学習の効果—学生の高齢者体験レポートの分析, 東京厚生年金看護専門学校紀要, 9(1), 7-23.

井澤晴美 (2008). 高齢者理解に向けた体験学習の効果第2報—学生の高齢者体験レポートの分析, 東京厚生年金看護専門学校紀要, 10(1), 22-28.

近藤裕子 (1997). 『花伝書』の内容を看護技術の習得に応用する—「かたち」から「型」へ, 香川医科大学看護学雑誌, 1(1), 1-9.

近藤裕子 (1998). 看護学生の老人理解に関する研究—能による老体の表現を中心として, 香川医科大学看護学雑誌, 2(1), 41-45.

表章, 加藤周一 (1996). 世阿弥 禅竹—芸の思想・道の思想1, 日本思想大系新装版, 岩波書店, 東京.

高岡哲子, 千葉悦子, 渋谷恵子 (2008). 学生の興味に合わせて作成した疑似体験プログラムの検討, 看護人材教育, 5(1), 135-142.

竹田恵子, 兼光洋子, 太湯好子 (2001). 高齢者疑似体験による高齢者理解の可能性と限界—実習時期による学習効果の違い, 川崎医療福祉学会誌, 11(1) 65-73.

竹村美恵, 小澤絵里 (2009). 看護学生の高齢者疑似体験学習の学びの一考察, 愛知きわみ看護短期大学紀要, 5, 25-32.

田浜あづさ (2007). 老年看護学におけるシミュレーションゲームを導入した体験学習INTO AGAINとその関連演習展開後の学び, 日本看護学会論文集看護教育, 37, 363-365.

山崎正和責任編集 (1983). 世阿弥, 中央公論社, 東京.

横山ハツミ, 林慎一郎, 田中秀樹, 西川まり子,

廣川聖子, 片山はるみ (2009). 看護学生の「ライフイベントCAIゲーム」における老化の感情体験, *インターナショナル Nursing Research*, 8(2), 99-106.